The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス語の複合過去の機能 ： 事態の知覚と心理的近接性
Author(s)	安西, 記世子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58289
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【19】

氏　　名	安　西　記世子（あん　さい　きよこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４１４３　号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 7 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	フランス語の複合過去の機能 ―事態の知覚と心理的近接性―
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　春木　仁孝 （副査） 教　授　木内　良行　　准教授　井元　秀剛

論 文 内 容 の 要 旨

フランス語の複合過去は、形態的には、avoir（持つ）またはêtre（いる、ある）の直説法現在形と動詞の過去分詞から成る。複合過去の本来の価値は、現在における事態の完了を表すことである。その具体的な用法は、継続（過去の一時点から現在までの継続）、経験（現在までの経験）、結果（現在における結果状態）、急速完了（発話時点から見てすぐに完了する事態の確定）、先行性（一般的な事柄に先行する事態）である。完了を表す複合過去は、過去の事態をひとまとまりに表す単純過去と対比を成して用いられていた。しかし、現代フランス語の話しことばでは、現在とつながりのある過去の事態は複合過去が表し、単純過去は書きことばでのみ用いられて、現在と断絶した過去の事態を表す。このように、現代フランス語では、複合過去も単純過去も過去を表すが、話しことばと書きことばという基準だけでは区別はできない。なぜなら、複合過去は書きことばでも単なる過去の事態を表すからである。いくつかの先行研究において、単純過去は現在と断絶した遠い過去を表し、複合過去は現在と結びつく近い過去を表すという指摘がなされている。ただし、そこで出された例文を観察すると、単純過去の方が複合過去よりも近い過去を表していることがあり、客観的な過去の遠近によって2つの時制が区別されているわけではないと考えられる。小説などの地の文において、単純過去と複合過去が過去と完了によって区別されることなく、どちらも過去の事態を表しているとき、この2つの時制形式は、文単位で、あるいは段落単位で交替することが多いが、中には、同じ主語を持つ1つの文中で交替することもある。その際、複合過去は別の事態に対する先行性を表しているのではなく、単独で過去のある時点に起こった事態を表している。このような現象を前にして、単純過去と複合過去の違いを、過去と完了、現在との断絶もしくはつながり、過去の遠近、話しことばと書きことば、という基準だけで区別することはできないことがわかる。そこで、本研究では、本来の完了という意味を維持しつつ、話しことばと書きことばの両方で用いられ、書きことばにおいては単純過去と共起して過去も表す複合過去に焦点をあて、様々な文脈で用いられた複合過去に共通する機能を明らかにすることを目的として、先行研究を批判的に考察し、仮説を立て、その妥当性を例証した。

これまでの複合過去研究に共通している点は、過去と完了という2つの主要な価値を認めているということ、過去用法の複合過去は現在とつながる事態を表すということ、完了用法の複合過去は過去の事態の結果として生じた現在の状態を表すということであろう。文脈的な要因としては、動詞の語彙的な意味と副詞が2つの用法を区別することが多い。事態が実現する唯一の瞬間を語彙的に含む動詞は、アスペクト研究において限界動詞と呼ばれることが多く、含まない動詞は非限界動詞と呼ばれることが多い。限界動詞の複合過去は、過去の一時点に事態を位置づける語を伴っていなければ、完了を表しやすい。それに対して、非限界動詞の複合過去は、特に現在の状況と密接につながる意味を表す語を伴っていなければ、過去を表しやすい。特に会話では、事態は現在の発話状況と必然的に結び付けられるので、限界動詞の複合過去が表す結果状態が発話時点において捉えられ、非限界動詞の複合過去が表す過去の事態が発話時点から振り返って捉えられやすくなるといえるだろう。発話時点における話し手の事態の把握の仕方という観点から複合過去の用法を分析しているものとして、Imbs ([1960] / 1968) の研究が挙げられる。この研究では、複合過去のいろいろな用法において、事態は発話時点との関係でどのように捉えられるのかが、複合過去と共起する語や文脈的な要因との関係で詳述されている。また、会話文の過去用法は、ほぼ経験的な (quasi expérimentale) 心理的近接性 (proximité psychologique) を表すと指摘されている。この指摘は、過去用法だけでなく、複合過去のすべての文にあてはまるのではないかと考えられる。

会話文の複合過去は、発話時点における話し手の心的態度の表れ方が比較的理解しやすいが、地の文の複合過去はそうではない。地の文においては、事態を言語外的な現実の状況と結びつけることが容易ではないからである。また、地の文における複合過去を考えるときには、単純過去との違いを考慮しなければならない。Benveniste (1966) の研究では、単純過去と複合過去は récit historique と discours という2つの発話プランによって、区別されている。単純過去が3人称を基本とする récit historique の発話プランに属するのに対して、複合過去は、1,2人称を基本とする discours の発話プランに属する。このプランの基本的な時制は現在形であり、複合過去は現在との関係で主に3つの意味（過去、完了、先行性）を表す。この理論が完全にあてはまるのは、地の文は単純過去で書かれ、直接話法は複合過去で書かれている小説や物語である。しかし、実際には、このように時制が使い分けられているわけではなく、地の文でも複合過去は頻繁に用いられ、単純過去と共起することが多い。上で既に述べたように、1つの文で単純過去と複合過去が交替することもある（例：« c'est ainsi que je l'ai connue, ainsi que je la vis mourir.» ）。このような例を説明するには、発話プランの交替ではなく、語り手の事態の把握の仕方について、別の定義が必要になってくる。

地の文の複合過去で問題になるのは、単純過去と共起して過去を表す複合過去であろう。このことについて論じた研究は少ないが、Leeman-Bouix (1994) と春木 (2002), (2004) では、複合過去が表す語り手の心的な態度と事態の限界達成（実現の最終段階に達したこと）が考察されている。両研究で挙げられている *Le Petit Prince* では、同一文脈で、同じ動詞が単純過去と複合過去に置かれている (« Alors j'ai dessiné » と « je dessinai. »)。Leeman-Bouix は、単純過去は事態に対する心的な距離感を表し、複合過去は現在において積極的に行動をしようという心的な態度を表しているという具体的なコメントをしているが、どちらもニュアンスの指摘にとどまっている。春木 (2002) では、同じ例の複合過去は期待された事態の限界達成を表すと考えられている。春木(2002)、(2004) の研究を通して、地の文で単純過去と交替する複合過去は、語り手の心理領域に属する事態を語るために用いられるという主張がなされている。そこで挙げられている例文を観察すると、主語は1人称が多く、動詞は感情や知覚を表すものが多い。

先行研究の批判的検討を通して、会話文の複合過去は、話し手が直接的に知覚し、経験した事態、もしくは、発話状況と直接関連づけられた事態を表すと考えた。そこで、事態は心理的に近いものとして捉えられることになる。地の文の複合過去は、登場人物が過去の場面を思い出して視覚化し語る部分や、心中の思いを表す部分で用いられることが多いということがわかった。ここにも会話文と共通する事態の直接的な知覚と心理的近接性がある。そこで、複合過去は、「事態の内的な限界達成の知覚に基づいて心理的に近い事態を表す」いう仮説をたて、例文を考察した。事態の限界とは事態が実現する瞬間であり、複合過去を用いることによって、動詞に内在する限界の達成が示される場合と、複合過去を用いることによって限界が課され、同時にその限界の達成が示される場合がある。文脈によって、限界達成が焦点化され、完了的な事態を表すこともあれば、限界達成が最大限に背景化され、ひとまとまりの過去の事態を表すこともある。後者の場合でも、事態は内的限界の達成を含意している。本来は、アスペクト的な固有の価値において用いられていた複合過去は、言語の通時的な変遷を経て、経験、継続、結果状態だけではなく、単なる過去を表すようになったが、アスペクト的な用法でも、テンス的な用法でも、事態に対する直接的な知覚と心理的近接性がその意味に含まれている

この仮説を例証するにあたって、会話文と地の文を区別した。ある例文がどちらに分類されるかは、話し手と

聞き手の直接的な対話の有無によって決めた。会話文には話し手から聞き手への伝達が必然的に含まれ、その目的に応じて事態は言語外的な現実の状況と結び付けられる。話し手は単に事態を過去の一時点に置くために話すことはなく、たとえ遠い過去の歴史上の事柄であっても、それを話題にするときには、何らかの伝達意図を持っている。もちろん、話し手が生まれていない時代に起こった事態を直接的に知覚することはできないが、そこには何かを説明しようとする話し手の心理的な態度がある。このような特徴を有する会話文においては、アスペクト的な局面変化が背景化した過去の事態を話すときにも、複合過去が用いられるようになったと考えられる。話し手は、実際に経験をしていない事態であっても、何かを説明しようとする意図を通して、心理的に近いものとして話す。地の文においては、複合過去は、事態の知覚および理解や感情などを通して語られるときに用いられる。その結果として、単純過去と対比的に説明的なニュアンスを帯びるようになることもある。このことは、知覚、回想、直示、理解、感情、コメントなどを示す語句と共起しやすいという事実によって証明できる。もちろん、これらの語句は単純過去とも共起する。しかし、複合過去と単純過去が交替するときには、単純過去よりも複合過去と共に現れやすいという事実があり、これは複合過去の機能を裏付ける傍証となりうるだろう。事態に対する直接的な知覚を表す複合過去については、知覚動詞との共起、回想場面との関係で考察した。知覚動詞の複合過去が事態の知覚を表すのは当然であるが、知覚動詞であれば常に複合過去が用いられるというわけではない。事態の経験者の知覚に焦点があたり、事態が心の中で捉えなおされ、あたかも目の前で起こったかのように視覚化されるときに複合過去が用いられる。語り手が実際に経験した事態を語るために用いられる複合過去は、回想の複合過去として分類できる。その際には、se souvenir のような記憶を表す動詞や主観的副詞などを伴うことが多い。これらの語によって、地の文に一時的に登場人物の回想世界が構築され、その中で事態は直接的に知覚されて語られることになる。心理的近接性は、複合過去が事態の直接的な指示と心情的な把握を意味する語を伴って用いられることによって例証できる。直示語と共に用いられた複合過去は、語り手が直接的に指し示すものとの関係で事態が語られる。このことは、空間的、時間的、または前に出てきた語への照応を通してなされる。いずれの場合も、事態は語り手の視点から直接的に捉えられ、心理的に近いものとして表される。複合過去が感情動詞や感嘆文と共起すると、事態の知覚によって生じた感情を表出させることになる。複合過去が語彙的に感情を表していなくても、同一文脈中の自由間接話法的な文と結びついて、語り手の事態に対する心情が表出し、地の文における事態の主観的な焦点化につながることもある。知識を表す動詞が複合過去におかれるときには、一旦理解したことを改めて語ることになる。この場合、単に過去の知識を述べるのであれば単純過去が用いられるが、その知識が今も存続していることを表そうとすると複合過去が用いられ、事態は心情的に焦点化されることになる。傾向として、1人称主語の複合過去が最も事態との心理的な近さを表しやすいが、3人称主語の複合過去にも、事態との心理的近接性は含まれる。たとえば、一般的な判断や評価を表す語句と共起すると、事態は主観的な判断のもとで語られることになり、説明的なニュアンスを帯びる。地の文の複合過去は様々な語句と共起するが、いずれの場合にも、事態に対する直接的な知覚の延長上にある心理的な近接性を表しているということができる。複合過去の機能をこのように定義することによって、会話文と地の文の両方において、様々な文脈で様々なニュアンスを伴って用いられる複合過去を、統一的に説明することができたと考える。

論文審査の結果の要旨

安西記世子氏の学位請求論文「フランス語の複合過去の機能 ― 事態の知覚と心理的近接性 ―」は、フランス語の時制体系における複合過去の機能について、同じく過去を表す単純過去などとも比較対照しつつ、多くの実例に基づき考察したものである。

現代フランス語においては書き言葉では単純過去が過去の継起的な事態を表し、話し言葉においては複合過去が過去の事態を表すと説明されることが多い。書き言葉に現れる複合過去は経験や継続などを表すとされる。この教科書的な説明に対して言語の実態は実はかなり複雑な様相を呈している。小説などの書き言葉においても、地の文に単純過去と複合過去が混在していることも珍しくない。極端な場合には同じ文の中に二つの過去形が併存している例さえある。

安西氏はこれまでの先行研究を丹念に検討した上で、会話文における複合過去を考察して話し手による事態の知覚の仕方と話し手の心的態度の現れ方を分析する。次いで、地の文、特に「星の王子様」における複合過去について考察する。さらに単純過去との比較などを行いながら考察を進め、結論として複合過去は発話者の知覚を通して事態の限界達成を示し、そのことにより心理的な近接性を表すと結論づける。

安西氏は主要な先行研究を詳しく検討している。それら先行研究の成果の上に立って複合過去の複数の「用法」を統一的に説明することを試みている。その際、自ら収集した非常に興味深い例を数多く分析することで本論文の主張を強固なものにしていく。たとえば、よく知られたBenvenisteのhistoireとdiscoursという時制を二つのプランに分けて説明しようとする考えでは、地の文における単純過去と複合過去の交代を説明しきれない事を示し、自らの限界達成と事態の直接的な知覚というとらえ方をすることによって始めてそのような二つの時制の交代も説明できることを示している。

ただ、キー概念となる限界達成や事態の直接的な知覚というものがどういうものであるのかということは、実例の分析を通して次第に明らかになっては来るものの最後まで多少の曖昧さが残る。それらの定義をもう少し明確に示してあれば、氏の主張がより説得力のあるものになったのではないかと思われる。またすべての複合過去の例に対して直接的な知覚という捉え方が当てはまるのかという疑問も審査においては出された。また、単純過去だけでなく、物語的現在など他の関連する時制をも視野に入れて全体的なシステムを考えていくことも今後必要かと思われる。しかし、全体を通してみた場合、本論文は、現代フランス語の複雑な時制システムの重要な部分を一貫した主張で分析し、論じたものであり、時制システムの理解を一歩進めたものであると言うことができる。

以上のように、当論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。